『中世伊勢神宮史の研究』

小野善一郎

言説化した。
言説化した。
言説化した。
言説化した。

照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記』という見解がほぼ通勢二所皇太神御鎮座伝記』、『豊受皇太神御鎮座本紀』、『天の書であるが、現在、その成立順序については、久保田収の書であるが、現在、その成立順序については、久保田収の書であるが、現在、その成立順序については、久保田収の書であるが、現在、その成立順序については、久保田収の書であるが、現在、その成立順序については、久保田収の書であるが、現在、その成立順序については、外保田収の書である。

あり、 えて、伊勢神宮をめぐる諸問題をはじめ、 の線上で解明しようとする方法である。 研究されている。具体的には、中世伊勢神宮史を中心に据 が多かったが、それらを総合していくという画期的視点で をめぐる社会経済史や政治史などは別々に論じられること 泉隆房氏は本書において、従前、伊勢神道思想と伊勢神宮 れたままの状態にあると言えよう。そのような状況下、平 全体的に見るならば、今日も依然として多くの問題が残さ たが、その後、個別にはすぐれた研究成果はあるものの、 神道について、「ほとんど未開の荒野にある」と指摘され 以下、本書の構成とともにその概要を紹介し、 だが、その成立時期並びに思想形成要因については諸 しかも論者に差がある。 かつて久保田博士は、 伊勢神道をもそ 最後に若 中世

前編 中世伊勢神宮史の基礎的研究干の所感を述べてみたいと思う。

遷宮を中心として一

序 章 中世伊勢神宮史研究の現状

第

一文治建久年間を中心としてーー 鎌倉前期の遷宮とその問題点一章 鎌倉前期

三 神宮作所の発生と展開

中世伊勢公卿勅使考

説となっている。

神宮大訴小考

鎌倉中期の遷宮とその問題点 鎌倉中期

―弘安正応年間を中心として―

第三章 鎌倉後期 遷宮装束神宝用途調達と鎌倉幕府

鎌倉後期の遷宮とその問題点 永仁嘉元年間を中心としてー

後編 伊勢神道の研究

遷宮上卿考

前期伊勢神道研究の現状と今後の課題

章 伊勢神道の成立

伊勢神道の成立

伊勢神道への真言教義の影響

第二章 伊勢神道の展開

度会行忠の神道論 0 周辺

度会家行の神道論の周辺

になりつつある点や、それに伴って新たに生じた問題等に 成っており、 右を見れば知られるように、本書は前編と後編とから 前編 前編で伊勢神宮史、 序章では、これまでの研究によって明らか 後編で伊勢神道を論じる。

その前後の神宮史や遷宮経済との関連で議論されていない

ついて詳述。

これにより、

従前、

伊勢神道の成立や展開

という問題点を浮き彫りにしている。

宮内部は内外両宮とも協調関係にあり、両宮はまた朝廷と その周辺について、遷宮を中心に考察。これにより、 ついて検討する。その第一節では、鎌倉前期の伊勢神宮や 第一章は、鎌倉前期の遷宮をめぐるさまざまな問題点に

緊密に連携していたこと」などを明らかにされている。 第二節では、平安後期から鎌倉期までの公卿勅使につい

円滑にいっていること」、また「遷宮に際しては幕府とも

異常に際して仮殿遷宮が行われ、その過程で発遣される公 から選ばれること」などを明瞭にしている。さらに心御柱 皇の信任厚い人物で、しかも一般的には複数の特定の家門 て検討を行っている。その結果、その選任方法について、「天

卿勅使の事例に注目する。

解を明らかにされている。 内外両宮祠官が良く協調していた」ことなど特筆すべき見 に遡らせて考える傾向が強いが、 外宮祠官度会氏出自の者が就任している例の複数あるこ けての実態を考察。このことにより、「内宮遷宮の作所に、 第三節では、神宮作所について鎌倉期から南北朝期にか 中世後期以降の「内宮外宮祠官の対立を、 実際は、 一時期を除い それ以前

448

六波羅探題に直接出向いて訴訟に及んだ」ことを明確にし り、「両宮禰宜申状(注進状)を携えて祠官が上洛し、ある いは弘安相論時のように神宮使をたてて、彼らが朝廷また 神宮大訴の実態について検証する。これによ

ことなどを指摘する。 事実両宮共に殿舎『未作』が相次いだ」。また、「遷宮費用 結果、「弘安年間の両宮正遷宮は料材不足が深刻であって、 弘安正応年間の遷宮を中心に考察が進められている。その の主要財源である役夫工調達も思うように進まなかった」 第二章は鎌倉中期の伊勢神宮史を検討。その第一節では

だった」ことを明らかにする。 「『関東御訪』つまり幕府に依存するかたちで調達している になっていて、幕府に依存しなければ完遂できない状況 事例」を発見し、「すでに遷宮財政がきわめて苦しい状況 を行っている。これにより、装束神宝金物用途に関して、 神宝用途の調達に焦点を当てつつ神宮経済」について検討 第二節では、「伊勢神宮遷宮関連の諸経費なかでも装束

察。このことにより、「係争中の皇字事件の影響は認め難 している。その第一節では、「永仁から嘉元年間の両宮遷 当該期 の神宮およびその周辺」について考

第二節では、

第三章は、永仁年間以降の鎌倉後期の伊勢神宮史を検討

た」ことなどを明らかにする。 こと」、「幕府に成功を募って御装束用途を賄う事態であ 内外両宮祠官は良く協調して遷宮行事にあたっていた

よる談合という形で決していた」と説く。 催徴の決定について、「天皇の勅問に対して少数の公家に られていること」を明らかにしている。また、役夫工米の されている。その結果、「上卿が特定の門流から多く任じ 第二節では、遷宮上卿・役夫工上卿に焦点を当てて検

ている。 先行学説の紹介とともに、それに伴う課題等について論! 後編では、まず、序章において、前期伊勢神道に関する

れと酷似している」ことを明らかにされている。また、「外 過程を検討されたところ、それは、「『宝基本記』 奥書のそ て考察。とりわけ、『建久元年内宮遷宮記』の伝来、 立並びに平安最末期における外宮祭神に関する問題につい について検討する。その第一節では、初期伊勢神道書の成 第一章は、 前期伊勢神道の成立に関する時期・事情など

と」を指摘。その上で、「神道五部書など初期伊勢神道書 と「七種祓」に看取される仏教思想の影響について考察 の成立年代を鎌倉初期」と推定している。 宮祭神皇御孫尊説が平安最末期に確かに存在していたこ 伊勢神道で重視された「中臣祓天神祝詞

449 評 (小野) 書

450

間違いない

道書の両宮本誓理趣摩訶衍との関連がある。また、 らかにする 天神祝詞には、 ている。その結果、七種祓の一つ天都祝言惣咒は、 理趣経の思想が反映していることなどを明 中臣祓 両部神

ろ、行忠は神宮に伝わる古伝や古伝承の集大成」をした人 六年(一二八三)に外宮禰宜を解任された理由について検 うに解してきた従来の通説は修正されねばなるまい。むし 証。その上で、「彼の神道論を、彼が新たに作り上げたよ ての検討を行っている。 第二章は、伊勢神道の確立に大きく寄与した人物につい その第一節では、度会行忠が弘安

物と位置づけている。

むしろ亀山上皇の『弘安の御祈願』が内法外法にわたる祈 と伊勢神道との関連に注目することが通説となっているが、 また、「久保田収氏以来、蒙古襲来による神国思想の高揚 よって伊勢より持ち出されたことを考えて良い」と論じる。 京より伊勢にもたらされたし、逆に伊勢神道書が祭主家に たところ、度会家行の引用した「古典は、祭主家を通じて 第二節では、現存する伊勢神道書の伝来について検討し

に、その研究方法は伊勢神宮史を中心に据えて多方面から が促進された、とみるべきこと」などを主張している。 願祈禱であったことより、これを機に神宮祠官の仏教理解 雑駁だが本書の要旨を述べた。 冒頭紹介したよう

ば通説と言ってよい見解である。

之御中主神、國常立尊と称して神号を改竄して五部書を作 くもので、幸和以来多くの研究者に支持されてきた、 成した、と主張する。このA説は、厳密な考証主義に基 貧窮に及ぶのを哀しみ、内宮に対抗して外宮の御祭神を天 から、内宮よりも神格が低いので参拝者等も少なく祠官が て内宮の御祭神・天照大御神の御饌のことを司る神である ち、幸和は、外宮の御祭神・豊受大御神は御饌津神であ ると三つの見解に分かれる。仮にA説、B説、C説とする。 A説は、吉見幸和著『五部書説辨』に代表されるもの。 従前の伊勢神道思想の形成要因に関する学説は、 大別 明治聖徳記念学会紀要〔復刊第44号〕平成19年11月

者に認められている説である。 氏著『中世神道の研究』がある。 立場の樹立というものである。 の時と符号することに注目し、 B 説 は、 五部書の成立時期が蒙古襲来(文永・弘安の役) 主な学説として、 国家的自覚や神道の自主的 これもまた、多くの研究 久保田

化であって、外宮祠官が内宮祠官との政治的拮抗を有利に 外二宮争訟期に限らない神宮神職としての敬神思想の文章 格に関する補足的考察」)である。氏は「伊勢神道とは、 様の見解を提出されたのは、白山芳太郎氏(「伊勢神道の性 とを主張されている。さらに最近、このC説を支持し、同 を承認し、神宮三部書は平安時代末期には成立していたこ 高倫書写の識語について、問題点を持ちつつも認められて 座次第記』の神宮三部書に共通している文治元年(一一八五 説の重要な論拠が、『御鎮座伝記』、『御鎮座本紀』、『御鎮 出たものではない」と論じ、 れるもので、 するため生ぜしめたものではない」と断じる。 いることである。近年、 厳修の基礎のためのものであり、他宗攻撃などとの念より 氏は 「中世伊勢神道、 田中卓氏は、この高倫書写の識語 A 説、 その神道神学は祭祀 B説を否定された。C

さらに、①遷宮に関しては、内外両宮祠官が良く協調して 程が酷似しているということを明らかにされたのは卓見で あると思う。これにより、『宝基本記』の成立は、 基本記』の奥書と『建久元年内宮遷宮記』の伝来、 た結果、先学説の再考は必須のこととなろう。 の考証により、今後も動かないいくつかの卓説が提出され このように従前、三つの見解が提出されているが、 以前であることが確実となったからである。 書写過

> 説 いように推定される。 関するA説(内宮に対抗して外宮の御祭神の神格高揚説)、 書の見解を併せて考えるならば、 宮史や遷宮史のなかから伊勢神道が出現したこと、 秘書』や『古老口実伝』によってみるべきこと、④伊勢神 確かに存在していたこと、③度会行忠の神道論は、『神名 当たっていたこと、②外宮祭神皇御孫尊説が平安最末期に (蒙古襲来による神道の自主的立場の樹立説)の成立は 既述の神道思想の形成に 等の本 В

0

事項であり、その内容には一層信憑性が増してくる。『文 立年代を鎌倉初期」との主張に対して反論もある。 治元年記』の『神祇本記上下・宝基本記・大田命訓伝各一巻』 る部分を削除すると、(中略)一禰宜 について、「『文治元年記』の中から、 である神宮三部書に共通している文治元年高倫書写の識 の見解である。氏は、 岡田莊司氏(「『御鎮座伝記』 奥書所収の『文治元年記』 について」) しかし、平泉氏の「神道五部書など初期伊勢神道書の C 説 (祭祀の厳修説) (長官) に関わる重要 行忠加筆と推定され の重要な論拠 それは 成

内

十年ぶりに再発見され、 以前成立説は根拠の弱いものとなる」と論じる。 のものの信憑性が問題となり、『神宮三部書』の文治元年 の部分が加上・改竄であるとすると、文治元年高倫奥書そ 真福寺所蔵の度会行忠自筆 軸木から幻の 「行忠之」の墨書が 『御鎮座伝記』 451 書 評 (小野)

は、

最近、

てよいだろう」と述べている。現れたが、その選者について、「行忠自身の撰作と確定し

身が、 泉氏の指摘するように、伊勢神宮史や遷宮史の中から生ま 見解を述べた。 **倉初期頃と推定したが、神宮三部書については、高倫書写** 成立についての一視点」)において、『宝基本記』の成立を神 きがある。私は先の拙稿(「『造伊勢二所太神宮宝基本記 も当てはまると考えられる。 の考証によれば、 れたことは間違いないであろう。そしてそのことは、本書 研究した一つの成果と推考。 眼前の末法という時代背景を克服するために、神宮祠官自 の奥書の信憑性に疑問があるので鎌倉初期成立には否定的 宮祠官の祓信仰の観点より考察した際、その成立時期を鎌 このように神宮三部書の成立時期に関しては、 自らの職掌に強い自覚を持ち遷宮に関する古伝承を しかし、『宝基本記』 神道五部書全体の思想形成要因について つまり、『宝基本記』は、 述作の目的については 今なお開

より有力となってきたと言えるのではなかろうか。思想形成に関しては、従前のA、B、Cの三説中、C説が期に関しては、なお論者に差があるものの、神道五部書の以ずれにしても本書の出現により、神宮三部書の成立時

冒頭紹介したように、その思想の眼目は、天照大御神の神最後に、伊勢神道思想の本質について、附言してみたい。

想とは対極に位置する重大な意義を発見し、それを言説化を超克するために、式年遷宮に関する古伝承の中に末法思である。それは当時、神宮祠官が、末法思想の蔓延した世大切な「いのち」を授かった神性な存在であるというもの言によって示された「心神」思想。即ち、私どもは神より

したものと推考される。

は、 えられる。つまり、 思想の面からも神宮史・遷宮史の研究が切に求められてい 遷宮史の中より出現したことを明確にされたが、 ずる。平泉氏は、 りながら、自らの「心神」を明らかにすることであると信 したように、私ども自身が、伊勢神道の「いのち」にすが 救うものは、 在ほど極めて深刻な事態はないと思う。そしてその混迷を 代は異なるが、 翻って現下の我国を取り巻く諸問題に目を向ける時、 いつの時代においても根本問題なのである。だが、 中世の神宮祠官が自らの職掌の重大さを自覚 その問題の本質的な構造は同一であると考 本書において、 末世的な人心の荒廃である。 伊勢神道が伊勢神宮史や この問題 今日ほど 時

体九五〇〇円) 本九五〇〇円) 本九五〇〇円) 本九五〇〇円)

本

る時代はないと考えられよう。

(湯島天満宮権禰宜)